

「銀座街づくり会議」 シンポジウム

「世界都市のなかの銀座」

〈共催〉 銀座街づくり会議・銀座通連合会・全銀座会 〈後援〉 中央区

華やかな外国ブランドが次々と銀座に出店しています。

銀座のどこに魅力を感じて出店しているのでしょうか？

また世界の街から見て、銀座はどのような街であり、どんな特徴があるのでしょうか？

世界の洗練された街を知る方々、老舗とは何か、本物とは何かを知る方々に、

大人の街・銀座の魅力、そして今後の銀座への期待を語っていただきます。

2004年10月21日(木) 14時～16時

ヤマハホール

講師プロフィール

リシャル・コラス Richard Collasse

シャネル株式会社代表取締役社長。75年パリ大学東洋語学科卒、95年ハーバード大学Advanced Senior Management Program 終了。ジバンシイーの日本法人会社設立に参加、4年間代表取締役を勤めたのち、シャネルに入社。95年よりシャネル株式会社代表取締役社長に就任、現在に至る。2002年欧州ビジネス協会(EBC)会長に就任、またユーロ・ジャパン ビジネス ダイアログ ラウンドテーブル(EUJBDRT)ワーキンググループ1(貿易&投資部門)共同議長に就任するなど、広く活躍中。

大内順子 Oouchi Junko

ファッション評論家・ジャーナリスト。青山学院大卒。新聞、雑誌等で多く執筆し、TV番組の企画・出演、講演や各種催事のプロデュースを手がける。また、国内外の様々なコンクールの審査員としても活躍。2001年には、仏政府より芸術・文化勲章オフィシエ賞を受ける。著書には『おしゃれのエッセンス』他多数。

團紀彦 Dan Norihiko

建築家。團紀彦建築設計事務所代表。新日本建築家協会新人賞、日本建築学会賞業績賞など受賞多数。NEW TAIWAN by DESIGN国際コンペ1等(日月潭地区、CKS Airport)。作品に「八丈島のアトリエ」「ウトコリミデット室戸工場」他多数。

見城美枝子 Kenjo Mieko

青森大学教授・エッセイスト・ジャーナリスト。早稲田大学大学院理工学部研究科修士修了。99年より同大学博士課程に在籍、日本建築の研究を進める。TBSアナウンサーを経て、その後フリーに。海外取材を含め、53カ国以上を訪問。また対談、講演、テレビでも活躍中。著書に『会話が苦手なあなたへ』(リヨン社)他多数。



竹沢 皆様本日はお忙しいところ、また台風の余韻も残るなか多数お集まりいただき、ありがとうございます。これより全銀座会主催、銀座街づくり会議、全銀座会催事実行委員会、銀座通連合会共催の銀座街づくり会議シンポジウム「世界都市のなかの銀座」を開催致します。私は銀座街づくり会議にて企画運営を担当しております竹沢と申します。本日の進行をさせていただきますので、よろしくお願い致します。

開会にあたりまして、主催者挨拶と致しまして、銀座街づくり会議評議会議長、銀座通連合会理事長であります、遠藤彬よりご挨拶申し上げます。

遠藤 どうも皆さん、お忙しいところ大勢お運びいただきましてありがとうございます。今、銀座では「プロムナード2004」ということで、いろいろなイベントを銀座で行っております。

この銀座街づくり会議というのは、これからも銀座らしい銀座を保っていくためにはどんなルールをつくったらいいだろうか、といったことを検証している会議でございます。そのシンポジウムをたびたび行って参りましたが、今回はその銀座の大きなイベントの一環として、街づくり会議が今日ここでシンポジウムをもつことになりました。

今日は「世界都市のなかの銀座」ということで、国際都市としての銀座の魅力ということを楽しめるリチャール・コラスさんにお話しいただいた後に、この前のパネルディスカッションにも参加いただいた、建築家の團紀彦さん、それから大内順子さん、パネルディスカッションのコーディネーターをしていただきます見城美枝子さん、我々の年代だとケンケンと言えはわかる方だと思いますが。青森大学の教授でいらっしゃる、建築を教えていらっしゃる先生です。今後銀座がどうなっていくのか、また銀座の街並み・景観が世界から見て銀座はどううつっているのか、ということを楽しんで聞かせていただきたいな、と思っております。簡単ですが、本日、本当にお忙しい中おいでいただいた皆様にお礼がたがた開会の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

●基調講演「国際都市としての銀座」

リシャール・コラス

竹沢 ありがとうございます。では早速本日のプログラムに入らせていただきます。ご講演をいただきます、リシャール・コラスさんをご紹介致します。どうぞ壇上におあがり下さい。コラスさんはシャネル株式会社代表取締役社長でいらっしゃいまして、ちょうどこの年末に銀座に新しいシャネルビルのオープンを控えていらっしゃいます。コラスさんには「国際都市としての銀座の魅力」というタイトルでお話させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

コラス ただいまご紹介にあずかりましたリシャール・コラスです。皆さんこんにちは。大変な台風の残りのあと来て下さって、本当にありがとうございます。

私はいつも困っていることが一つありますが、日本語がわかるということがバレーしているから、自分の母国語で話せないのでもいつも困っています。また、今日は自分のいつもの分野ではないので、多少緊張しております。先ほど、びくびくしながらあがってきたのは、妻とけんかしたわけじゃなくて、この講演から逃げるように骨折しようかなと思ったんですが、ねんざで終わってしまって中途半端で痛みだけ残っているので、お許しいただきたいと思います。

さて、今日は「国際都市としての銀座」というタイトルでお話しさせていただくことになってはいますが、本日のディスカッションの内容について簡単にご説明させていただきます。まず、私はシャネルの社員であるわけですが、少しでも自分の会社の宣伝をしようと、まずは“シャネルブランドのアイデンティティ”と言っても、ただ自分のPRをするのではなく、何かやはりシャネルというブランドのフィロソフィー、哲学というか理念と、まちづくりの理念には非常に共通点があるんじゃないかと思っておりますので、その話をさせていただきたい。

次に私の目から見た“銀座のアイデンティティ”について。歴史の勉強もしたのですが、1965年にあるフランス人の方、オーギュスタン・ベルクという方がいるのですが、彼が日仏学院の学院長だった時、日本に来てまちづくり（東京とパリ）についてかなり分厚い本をつくって下さって、おもしろい論文を書いています。そこから私はいくつかのことをひっばっています。

3つめの“世界のまちとプレステージ・ブランド”ということについては、プレステージ・ブランドは、世界のいろいろなまちで、非常にいい場所を借りて商売しています。そのことが、まちにとってどれだけプラスがあるのか、ちょっと説明させていただきたいと思います。



そして皆様方にとって、とても興味深いところとして“これからの私どもの銀座”“、そして“これからの私のシャネル”は何を考えているのか、秘密までは申し上げませんが、ちょっとお話しさせていただきたいと思います。

シャネルブランドのアイデンティティ

“シャネルのアイデンティティ”、それは言うまでもなく、ココ・ガブリエル・シャネル、私どもの創業者につながっています。彼女を知っていた人は皆、「彼女は性格が悪い人だった」と言うんですね。しかし、それよりほかに、いくつかのキーワードが彼女にはあって、一つはPassionate「熱意・探究心」、またとてもUnique「個性的・独自性」、これは非常にフランス人的な個性ですね。そしてAudacious「大胆・独創性」、彼女が20世紀の初めに考えたことや工夫したことには、それまで誰も考えなかったことがあった。その意味で、Visionary「先見性・夢」を持った人。そして最後にPerfectionist「完璧主義者」。今でも私どもの会社の中では、“完璧主義的な形の中でやる”ということが基本的な考え方になっています。言うまでもなく、ココ・シャネルの遺産を活かすということが、シャネルの世界の社員の一人一人の役割です。

次に「伝統の継承とモダニティ」という言葉がありますが、“伝統と職人技の尊重”というのが我々にとって非常に重要なことです。結局、自分の根っこを守るためには、どこから来ているか、どういったノウハウを持っているか、ということをやはり尊重しなくてはいけない。そこで、シャネルを支える工房がパラフェクションという会社をつくりました。私どもの業界の中で、オートクチュールという最高の洋服をつくっているいくつかのアトリエは、全てのブランドが使っています。しかし、そのアトリエがどんどん縮小して、例えば何代目かになってから、息子さんはやりたくない、もしくは技術がどんどんなくなる、そういった恐れがあります。そういったことが起こらないように、シャネルは5社をグルーピングして、パラフェクションという会社をつくったわけです。フランス語がわかる方にはこのパラフェクションという名前の意味がおわかりになると思いますが、「愛をこめて」という意味です。例えば「Desrués」という素晴らしいオートクチュールのアクセサリ。また、日本でも有名な刺繍の「Lesage」という会社。ルサーージュさんは20年前に刺繍を教える学校をつくったのですが、そこで一番多い生徒は日本人です。さらにオートクチュールの靴「Masaro」。そして何百年も歴史のある帽子屋さんの「Michel」。こういった会社が私どものグループの中に入り、彼らの伝統やノウハウ、技を守るためにパラフェクションをつくった



わけです。我々のような会社がなかったら、恐らく何十年か後には、なくなってしまうでしょう。

また、“継承されるスタイル” というのが重要だと思っています。ブランド固有、つまり私どもだけがもっているキャラクターというものがあり、そのユニークなデザインを一生懸命守りながらやっています。これは、私どもの今の専属デザイナー、カール・ラガーフェルドが、そのことをイラストレーションとして表したものです。自分が次のコレクションを一生懸命考えている時に何が浮かんでくるか、というと、ココ・ガブリエル・シャネルがつくったものが、まず浮かんでくるというものです。彼がよく使っている言葉、ゲーテという詩人の「過去を活かしてよりよい未来をつくるのだ」という言葉が書かれています、これが彼の基本的な考え方で、私どもの考え方でもあります。

左の写真はココ・シャネルの時代の1926年、The Little Black Dress。彼女が初めてつくったもので、アメリカのヴォーグには、「これはファッションのFORD T（車）」と言われました。これが現在も、カール・ラガーフェルドの毎年のコレクションに必ずあります。右の写真が最新コレクションの、Little Black Dressです。

ココ・シャネルはアクセサリーのパイオニアでもあり、真珠をたくさん身につけ、またコレクションにも使っていました。現在我々も同じように、真珠をアクセサリーとして使わせていただいています。

次にハンドバッグについてご説明します。左は彼女の考えたハンドバッグです。ここで一つお話ししたいのは、彼女の作っていたものには必ず機能性があったということです。このハンドバッグについて言うと、まずなぜキルティングかということ、皮が強くなり、傷が目立たなくなるからです。次になぜチェーンかということ、彼女がこのバッグをつくるまで、皆はバックをハンドバッグとして、手で持っていました。しかし現代の女性は動く、仕事をするので両手が必要になります。ですから、彼女はショルダーバッグをつくったわけです。つまりこのチェーンというのは、短くしたらハンドバッグにできるし、長くすればショルダーバッグとして使える。左の写真は、彼女の作った最初のハンドバッグで、右に現在のハンドバッグがあります。我々は、キルティングからももちろん離れません。

靴に関しても同じことが言えます。この「バイカラーシューズ」にもちゃんとした機能性があります。現代の女の人が仕事をするには歩き、靴は汚れます。ですから、汚れたところが目立たないように、先は黒くする、またベージュの色は足を細く見せ

るためです。

またよく「シャネルは根っこのないところはいかない、と言っているが、最近宝石をつくったじゃないか」と言われるのですが、実は1930年代には左にあるように、ココ・シャネルは純粋なダイヤモンドで何年間か宝石のコレクションをつくっています。右にあるのが現代の首飾りですが、これは彼女のデザインだったのです。

それらにつながる我々のポリシーは、3つあります。Consistance「一貫性」、Continuation「継続性」、そしてIntegration「統合・調和」です。

これをどのように実践しているかについて、まず「一貫性」についてご説明します。ここにいるのは、我々のトップクリエイターの方々です。一番右上にいるのが、アーティスティックディレクターのジャック・エリュール。彼はパッケージング、瓶、写真、つまり広告ビジュアル、またTVコマーシャル、すべてをマスターしている人です。この会社に入社したのは45年前で、彼は45年間ずっとアーティスティックディレクターとしてこの会社にいらっしゃる。また彼の前のアーティスティックディレクターは、彼の父だったわけです。そういった継続で、Consistency（一貫性）を守ることができるわけです。普通アーティスティックディレクターはティッシュペーパーと同じように、5年使ったら使えなくなる、と思われています。しかしうちでは45年使っています。右下は、私どものメイクアップクリエイター、ドミニク・モントクルトワで、彼はココ・シャネルと仕事をすることがある人です。毎朝、ココ・シャネルは、彼にメイクアップしてもらっていたんです。彼女のメイクをする時に彼は、彼女のカラーに関して、メイクアップに関しての考え方をずっと吸収してきたわけです。左下にいるのは、我々の調香師、ジャック・ポルジュ。彼は会社には30年以上います。最後に左上にいるのが、カール・ラガーフェルド。一番最近入った人ですが、それでも入社20年以上です。普通デザイナーは5年でころころ変わります。

「継続性」についてご説明します。私はこの写真が大好きなのですが、世界で一番有名な香水、シャネルNO.5の1921年から現在に至るまでの瓶の歴史です。パッと見はすべて同じですが、時代に合わせて少しだけ変えてきています。しかし、100年近く前の瓶と今の瓶が、それほど変わらない。そういった継続性がとても重要です。伝統と改革という言葉はかなり反対に見えますが、その伝統の中には改革があると思います。この写真でデモンストレートしたいことがあるので、この写真を覚えておいて下さい。

最後に「統合」。一目でシャネルとわかるアイデンティティ。皆さんはこの写真の

ブティックが、どこにあるブティックだと思いますか？パリにあるブティックだと皆さんおっしゃると思いますが、実は大阪のブティックなんです。

銀座のアイデンティティ

さて、“銀座のアイデンティティ”に入らせていただきます。まず、まちの構造が江戸時代から変わらない構造ですね。1624年の江戸初期からこういったまちの作りかたがされていて、右は1932年の昭和初期の図ですが、ほとんど同じです。私どもが2年前に買収した銀座の3丁目にあるスポットも、1600年代からほとんど変わっていないんです。こういった膨大なまちの中に、これだけのスペースが守られているのは、とても珍しいと思います。

ちょっと歴史の話をさせていただきます。今日は皆さんとてもお詳しい方ばかりだと思いますが、銀座とは1612年に銀貨の铸造省といわれる役所が置かれ、その時には「新両替町」という名前でした。こういった形で銀座はスタートし、コミュニティとして心のあった職人、商人、通人、そこから「粋」つまりエスプリとエレガンスが生まれたのではないかと思います。1600年代から1800年代の間に、染め物の紙問屋とか、鏡師、刀師、絵の具の専業等々、非常に伝統があり、職人の誇りをもった店が次々と集まっていた、ということが言えるのではないかと思います。そこから、銀座の独特の味、「粋」が生まれたのではないかと思います。

また、商いの革新という形で、次々と商店、百貨店が生まれました。いろいろな名前が浮かんできますが、伊勢屋、丸善庄屋、そして19世紀に入ってから時計・眼鏡の玉屋。1890年には銀ブラ、当時は銀ブラという言葉にネガティブな発想があったようなのですが、そういった言葉も生まれました。そして1924年には百貨店が次々とできました。この会場の隣にいらっしゃる松坂屋さんが最初の1924年、次の年に松屋、さらに1930年に銀座三越さん。その前から白木屋という百貨店がありまして、そこで1932年12月16日に大火事があり、14人の死者が出た大きな事件もありました。右にショーウィンドウの写真がありますが、1935年代に、舶来品、我々も20年前には舶来品と呼ばれていたわけですが、そういったものが集まり始めました。そして1987年にまちづくりの計画があり、煉瓦街のアーケードができました。そのインスピレーションがどこからきたか、フランス人としては非常に嫌な、許せないことなのですが、イギリスから来たんですね。トーマス・ウォートルスという人が、リージェントストリートをインスピレーションとしてつくったものです。これは関東大震災の

ときに、かなり壊れてしまい、そこから煉瓦街をなくした。更にもう一つ 1870 年代からかなり大きな影響を与えたものとして、新聞、通信社、出版社などが集まってきたそうです。

とても残酷なことに、1945 年頃、銀座は 4 丁目から 4 回の空爆でほぼ 100% 燃えてしまいました。資生堂の福原会長から何年か前に素晴らしい本、『銀座と戦争』という本をいただいて、本当に宝物にしているのですが、これはその本からとった写真です。しかしここから日本の復興のエネルギーは非常に力強く、1946 年からも銀座の建て直しが始まっています。

“新しい文化を生むパワー” というのが、銀座の我々が尊敬すべきところではないかと思います。1910 年代にはカフェという文化が始まり、1930 年代にはモガ・モボ。断髪ひきまゆの女性に、男はロイド眼鏡にスティック、ボルサリノという格好です。妻はこれを見て「あなたのお遍路さんの姿に似ているのね」と。確かに杖をついて、丸い眼鏡をかけて、こんな帽子を被ってはいるけれど、それはちょっと違うよ、と僕は言いました。1953 年には並木座という映画館ができ、そこからどんどん活発になりました。そして音楽。1951 年に銀巴里のシャンソンとか。そういった諸々の新しい文化、新しいことを日本に紹介したのが銀座でした。

あとはやはり、建築様式のパラダイスですね。ここにあるのは 1926 年から 1932 年に次々建てられた建物です。このうちのいくつかは今でも残っております。

そしてヒューマンスケールについて。歩くことを楽しむ街とありますが、1970 年代、初めて歩行者天国にして大成功しました。そこから銀ブラという言葉がネガティブからポジティブなイメージになり、非常に独特のリズムをもった、ブロックごとになんか変化のあり、楽しみながら歩けるということになりました。

またサーヴェイをするたびによく出てくることですが、空の広さですね。私も東京には 30 年近く住んでいますが、一つだけまったく感じられないのが空の広さです。パリでもあまり感じるできないのですが、例えばニューヨークは、あれだけの高層ビルのあるにもかかわらず、やはり空の広さは感じられます。東京で一番空の広さを感じることができるのはこの銀座ではないか、と思います。

また路地と界隈の魅力。銀座は、銀ブラで水平移動を楽しむまちなんですね。1930 年からある小さな道のようなおもしろいところがあって、入るとまるで縁側のようなところに入り込み、とても楽しいところがいっぱいあります。

新旧の融合、そのフュージョンがとても残っているところも、とてもおもしろいと

思います。右下には銀座で最初で最後のアパート、奥野ビルの写真があります。おもしろいことに、銀座にはもちろん住む方がいらっしゃいますが、基本的には住むためのまちというよりは、商売や楽しむためのまちづくり、というところだったんです。

シャネルと銀座の共通点

さて、先ほど私はシャネルのプレゼンテーションもしましたが、その上でなぜシャネルと銀座に共通点があるか、ということをお話します。先ほどの私の説明でおわかりいただいたと思いますが、「伝統の継承とモダニティ」がいかにか上手にそれを活かしながら、自分のアイデンティティを保っているか、ということではないかと私は考えています。

世界の街とプレステージブランド

世界のまちとプレステージ・ブランドの話に移らせていただきたいと思います。まず、パリにいきたいのですが、パリはオスマンによって大改造が行われた。その時の目的というのは、まず「衛生」。パリはもう2000年近く歴史のあったまちですが、非常に汚いまちだったんですね。

次に「治安」。「暗い道、甘い言葉」というのは日本の言葉ですが、つまり狭い道には甘い言葉、リスクがある。それで治安をつくりなおす。

そして「交通」の便ですね。考えてみると、19世紀のどまんなか、1850年代で、当時はまだまだ馬車しかなかったんですね。にも関わらず、シャンゼリゼのような、あれだけの幅の広い道をつくったということから、彼は非常に深いビジョンをもっていたのではないかと、思います。

最後に「壮麗」。どれだけきれいに見せるか、ということです。左のシャンゼリゼは、森に囲まれて、まだまだ田舎っぽい感じです。右がオスマンの作ったまちで、150年以上変わっていない、というところです。

パリのまちは、「界限プラン」で守られてきた、ということがあります。そこにはいくつかのおもしろいルールがあるのですが、まずはガバリ、というユニティのラインがあります。また眺望規制といって、基本的には3つの大きな規制があります。1つが「見通し」。これはあるところからぱっと広がる景色。2つめに「見下ろし」。ある高いところから下を見る場合は、手前の最低の高さが必要。3番目は「切り通し」。これはフランス語ではエシャペと言って、ある通りから見て突き当たりに何かある、



というヴィスタ。それに加えて、モニュメントの周辺の半径 500m 内では、細かいデザインコントロールがされています。それがフランス、特にパリのまちづくりです。とても厳しい規制です。こういった規制は、実際には大都市だけでなく、例えば私はとても小さなプロバンスにある村に住んでいるのですが、私の家を建てた時は、二つほどの違う規制にかかり、これも変えろ、これも変えろ、これをつくっちゃいけない、という非常に厳しい規制によってつくられました。結果、14 世紀の村の中で、20 世紀の末に建てられた家はまったく目立たない、気がつかないものになっています。

いくつかの例をお見せしたいと思います。これはフォーブル・サントノーレ通り (Faubourg St-Honore) の例。左が昔の写真で、右は同じところから撮った、現在の様子です。フォーブル・サントノーレ通りは、私どもプレステージ・ブランドの最も集まっている通りです。ここでお断りしておきますが、今日はシャネルの場所だけしかお見せしませんので、他のブランドに興味をもっていらっしゃる方は、よくよく探して下さい。(笑)

そしてローマ。ローマのコンドッティ通り (Via Condotti) というところですが、1967 年、そして 1969 年の写真です。そして現在の様子ですが、ここもやはり有名なブランドが集まっており、歩行者天国になっています。そこにもシャネルは幸いなことにございます。

ミラノ。ミラノにはモンテ・ナポレオーネ通り (Via Monte Napoleone) というところがあり、昔はこういうまちだったんです。そして今、モンテ・ナポレオーネ通りは同じように歩行者天国になる時間があり、また非常にブランドが集まっているところになっています。シャネルでお買い物をなさりたい方は、後で住所を聞いて下さい。

ニューヨーク。昔の 5 番街です。これは 1936 年と 35 年。そして現在の 5 番街。ここではフレンドリーコンペティターの建物をお見せしますが、これはカルティエさんですね。そしてもちろんシャネルもあります。

次に SOHO ですね。SOHO は最近の非常にいい例だと思います。ここは 15 年前なら、治安が悪く、SOHO には行くな、と言われていたと思います。ほとんどの建物はぼろぼろで、つぶれそうで、人が行かないまちだったんですね。1950 年代からそうで、1990 年代は一番ひどかったですね。そういったところに、New SOHO をつくり、一生懸命有名ブランドやレストランを集めたために、現在はとてもファッション性が高く、皆が集まるまちになっています。そしてここにもシャネルはございます。

ロンドンにいきましょう。イギリスはあまり見せたくないけれど (笑)。先ほど申

し上げた、銀座の煉瓦街のインスピレーションとなった、1820年代のリージェントストリート (Regent Street) ですね。その後、ここをモデルに銀座煉瓦街がつくられました。そしてオールド・ボンド・ストリート (Bond St.) ですね。ボンドストリートは1930年代、こういった感じだったのが、今はこういうようなまちになっています。ここもやはり、ほとんどの路面店がプレステージ・ブランドです。そしてここにはシャネルは2軒ございます。

これは、インターネットで見たら、おもしろいラインナップだったのでお見せします。このように、オールド・ボンド・ストリートには、ほとんどの世界の有名なブランドが一つも抜けずにあるのではないかと、思います。

さて、プレステージ・ブランドがまちにくると、何が変わるでしょうか。ここに書いてあるのがポイントです。まずまちをきれいにすることが第一ですね。先ほどのSOHOの例でわかりますが、治安が良くなるということがあります。また、まちのデザインと空気感が変わります。また来街者の属性が、多少変わります。そして、まちを盛り上げる、地域のフェスティバルの参加等々、クリエイティブなことがいろいろと起こります。後でお見せしますが、パリにもよく起きていることで、これはプレステージ・ブランドがきっかけとなって行われていることです。

去年はフランスにおけるチャイナイヤーでした。フランスのプレステージ・ブランドの集まりのコミテ・コルベルという委員会がありまして、我々のイニシアティブによって、welcome China to France という形でパリのまちの全体にそういった形でまちづくりをしました。

そしてイベントの創出ですね。パリ・コレクションはそこから生まれました。最後のポイントは、新たなビジネスを生む刺激となることです。まとめると、まちに新たな文脈、Contextを生み出すことが、私どもプレステージ・ブランドによって起きるのではないかと、思います。

これは地域フェスティバル、イベントがアベニュー・モンテーニュで行われたもので、パリでは毎年9月にはワイン収穫祭 (Vendanges Montaigne) が行われるのですが、これが今年、非常におもしろいことになっちゃって。そこには例えば、年をとったので私の文化ではないのですが、HIPHOPの歌手がいたり、それぞれのブランドのショーウィンドウの中に、HIPHOPのダンスをする人がいたり、ものすごくおもしろいフェスティバルになりました。また、夜には皆さん、タキシードやロングドレスを着て、4000人招待したら、なんと1万5千人集まったそうです。

これはカルティエさんの写真です。今日はカルティエさんの方、いらっしゃっている？ いらっしゃらないかな、残念ですね。シャンゼリゼに新しくオープンした時の様子です。シャンゼリゼ通りをきれいにしたパーティーとイベントをおつくりになりました。カルティエをご存知の方がいらっしゃったら、「今日はコラスがカルティエを一生懸命よく言っていたよ」、と言っておいて下さい。

世界と日本の街づくりの違い

さて、世界と日本のまちづくりの違いはどこにあるか、というと、一つはこれはエマニュエル・ベルクも言っていることですが「日本では残すのに理由がある」。結局フロー、流れの文化ですね。欧州では「壊すのに理由がある」。ストック、守る文化ですね。ですから、リノベーションの文化が、ヨーロッパで保全的刷新の文化が育っています。リノベーションの率を世界の国で見えますと、一番率が高いのがデンマークで、60%です。で、イタリーとフランスは率は同じくらい、デンマークの次で50%以上はリノベーションしています。日本は30%以下です。ヨーロッパで30%以下の国というのは、唯一ベルギーだけです。ベルギーは15%。

そのリノベーションのためには、かなりおもしろい技術が使われています。例えばパリは、外壁だけは必ず残します。後ろは壊していいのですが、前は残します。これはシャンゼリゼにある1995年のかなり大きな建物で、裏は内外装含めて工事をしたのですが、前の外壁はクレーンを建てて残し、裏は全て壊しました。こういった技術が、フランスにはあります。

あとは既存の環境と調和した店づくりですね。こういった店舗の設計というのは、よく行われています。確かに時々とても難しいものがありますが、やはり基本的には外観を守る、ということが基本的な考え方です。

話はちょっととんで、超高層ビルの開発への問題提起、というのがこの夏の初め頃に話題になりました。「トウキョウ・ウォール」と言われる、汐留とか品川辺りの超高層ビル群が、ヒートアイランド現象を加速させたという話題です。実際にいろいろなサーヴェイをしたら、“風の道”の喪失、ということがデータには間違いなく現れました。高層ビルがあるために、東京湾から吹いている風がどんと上がってしまい、まさに、特に銀座には風が抜けなくなったということです。とても驚くことがあったのですが、「ヒートアイランドへの挑戦！」ということで銀座1000人涼風計画というものです。どういうことかと言うと、まちを涼しくするためにみんながいっせいに水

のはいつているバケツを持ってきて、道に水をまくというものです。これは私はちょっと逆なんじゃないかと思いました。もしフランスでこういったことをしなさいといったら、もう大革命ですよ。日本人は優しいからやらないけどね。

欧州での都市と景観に関する考え方というのは、まずやはり法による規制、これは非常に厳しいですね。そして環境空間全体への規制、そして見晴らし、先ほどパリのまちの3つのルールを申し上げましたが、それらはやはり保全。やはり界限を守り育てる。オスマン公爵はもちろんまちを変えたのですが、それを守り育てる、というかたちが基本的な考え方ではないかと思います。日本は建築無制限の時代ですが、やはり制限の時代になる必要があるのではないかと思います。それぞれのまちのアイデンティティに即した界限づくり、ということではないでしょうか。

つい最近、私は鎌倉にうちを買ったんです。鎌倉の中で一番規則の厳しいところである長谷、大仏の裏です。その規制というのは本当に厳しくて、枝一本も切ることが禁止、家は木造でなくてはダメ、2階建てはダメ、土地を売るのは半分はダメ。私の日本人の友達には「お前は馬鹿じゃないか、こんな規則ばかりのところを買うなんて」と言われましたが、私は「いや、規則があるからこそあそこで買ったよ」と言いました。メンタリティは完璧に反対。だから日本人は買わないので、私はそこをかなり安い値段で手に入れました。ただ期待しているのは、日本人が気がついたら値段はぐっとあがるから。(笑)

これからの銀座

これからの銀座が、どうするべきか。まず1つのサーヴェイを見るたびに、銀座というのがまず出てくる。女性の方は圧倒的に銀座ですね。新宿は圧倒的に男性、それはわかるよね、西口があるから。あとは表参道、お台場とか。でも圧倒的に必ず銀座が出てきます。

それで、銀座が継承するべきまちづくりが何であるか、と考えると、やっぱりまず大人の街ということですね。ちびっこたちが集まるまちではなくて、本当に大人の街ですね。知的、風格、洗練、気品というところがある。また心地よい緊張感がある。確かに銀座のまちを歩くと、でたらめな形で歩かない。またそういう人を見ない。そしてOLD&NEWですね。新と旧の部分を守る。先ほど申し上げた空の広さ、そして路地や街路がいいということ。つまり、大人が歩く街、楽しい界限ということが、銀座というのはどうでしょう、と。



これから私は、ちょっと危険な道に入ります。銀座には、銀座のやり方があるんじゃないかな、と思います。ここでは銀座と六本木ヒルズを比較します。六本木ヒルズというのは、どちらかというと閉鎖的な限定空間ですね。ここは、predetermined、決まった理由で行くところです。集客の装置ですね。では、銀座は何か。水平的な回遊の空間。つまり unexpected、目的がなくて行くけれども、そこには自分が楽しめる場所を見つけられる、行くたびに新しい発見がある、という境界の空間。比較すると、境界の空間対集客の装置、ということですね。

これからのシャネル

これから、シャネルはどうするか。「ここでなぜコラス君はシャネルの話に戻るのか」、と皆さんはびっくりしたと思いますが、シャネルは皆さんを驚かすことが好きです。先ほど申し上げたように、私どもは3丁目の中央通りとマロニエ通りと、ガス灯通りの三角の土地、建物を買いました。これも先ほど申し上げましたが、我々が登記をして驚いたことは、ほとんどこの構造、フォーマットが1710年から変わっていないということです。そこで我々は建物を買ったわけですが、その建物は、皆さんがよくご存知のカネボウビルです。ワーナーブラザーズのビルになったのですが、ここには1938年からこの建物があり、この写真の場所でございます。

さて、どんな形式で、どんな感じで私どもの新しい建物を建てているのか、ということについて、30秒ほどのビデオをお見せしたいと思います。ご覧下さい。これは私どもの建築家が、自分のインスピレーションがどこから来たか、ということの説明するためのショートアニメですが。これは私どもの今年の春・夏のコレクションの、あるツイードのジャケットです。このツイードのジャケットを表現したカーテンウォール、ファサードをつくりたい、というのが建築家の考え方です。当然、カーテンウォールを本当にツイードでつくったら、今日みたいな台風があつたらよくないのですが、なんらかの形で表現して、12月のオープンをぜひ皆さんに楽しんでいただきたいと思います。

さて、これが建設中の様子です。今はもうほとんど工事も終わり、周りの方々には本当にご迷惑をおかけ致しましたが、そろそろ終わりますので、もう少しだけ我慢していただきたいと思います。後は約束しますから、静かに静かに仕事します。

もう一つお見せしたいのは、私は先ほど、1921年から現在に至るまでのシャネルのNo.5のボトルをお見せしましたよね？ このボトルがどうなるのでしょうか？ もしこ

うなったら、皆さんどう思います？ こうなったら、これはもうシャネルのNo.5ではないんですよね。銀座も同じことではないかと思います。

どうもありがとうございました。

● パネルディスカッション 「銀座 一本物に出逢うまち」

竹沢 ありがとうございます。

それでは次にパネルディスカッション「銀座-本物に出逢うまち」パネリストの皆様をご紹介させていただきたいと思います。まず最初に建築家でいらっしゃる團紀彦さんです。ファッション評論家・ジャーナリストとして国内外で活躍されている、大内順子さんです。先ほどご講演いただきました、シャネル株式会社、代表取締役のリシャール・コラスさんです。そして、本日コーディネートををお願いするのは、ジャーナリスト・エッセイストとしてご活躍されながら、青森大学教授として、教鞭をとっておられる、見城美枝子さんです。

それでは、見城さん、よろしくお願ひします。

見城 皆さん、こんにちは。先ほど、本当は私たち日本の者がいろいろ勉強しなくてはいけないものを、フランス人のコラスさんからすっかり教えていただきました。銀座を勉強するのに、いろいろな資料を読ませていただいて頭の中が混乱していたのですが、コラスさんの講義でよくわかりました、ありがとうございます。

さて、皆さんも銀座がどんな歴史を辿ってきたのか、また何をコンセプトにまちづくりが行われてきたのか、そして今どんな問題があるのか、おわかりいただけたと思います。しかし、どうしたらいいのかということが、刻々と秒読みの段階で実に銀座には起きています。今日は短い時間ですが、それぞれのご専門でご活躍のパネリストの皆さんにお話を伺って、そのあたりを皆さんと共に考えてまいりたいと思います。

それでは、大内順子さんからよろしくお願ひ致します。

大内 私はファッション・ジャーナリストという仕事をしております。これは、いろいろな解釈があるかもしれませんが、私自身の考えとしては、ファッションという世界で、生産者側・作り手側・デザイナー、それと一般の受け手の側、それをいかにいい形で結びつけるか、ということを中心に、できればただ紹介して結びつけるだけではなくて、私も含めた一般の者が、ファッションを通して少しでも人生を楽しく、世界を楽しくしていければいいな、というのが私の基本的な考え方です。そんなことを考えながら、この仕事をかれこれ四十何年やっております。



見城 その大内さんに「私の銀座」、どのようにファッションの最前線にたちながら銀座を見てこられたのか、体験してこられたのか、あとでお話を伺いたと思います。

次に、團紀彦さんをお願いします。

團 コラスさん、どうもありがとうございました。シャネルはロンドンやいろいろな都市に出店されていると思うのですが、一つ一つのまちに対してご理解があって、それで銀座に対する的確な視点を持っておられることが判り、僕らにも大変勉強になりました。僕も建築や都市デザインをやっているながらも、日本、東京の一番大切にしてきた街並みを持っている銀座に対して、まだまだ知らないことが多いのです。まずこのまちがどうできたか、ということを知ることが重要じゃないかな、と思っています。また、建築のあり方やそのまちづくりのあり方というものが、戦後のただただ建築物をつくっていけばいい、という時代ではなくなっていますから、建築家のあり方も今変わってきていると思う。ただ作ればいい、ということではなくて、そこにどういうものを残さなくてはならないのかという判断をすることも、大切な役割だと思っています。

実は、銀座の煉瓦街がウォートルスの設計であるということは学生時代からよく知っていたのですが、それが大久保利通がわずかの期間の間、東京の新府知事になった時の計画案だった、ということは知りませんでした。1872年に築地、京橋界隈が全部燃えて、ただちに大久保の前任者の都知事が再建計画を出すわけです。大久保は、1872年の3月に府知事になって、それで78年に暗殺されていますから、わずかその6年の間に、パリで言えばオスマン（オスマンもセーヌ県知事でした）のようなことをやった時に、一番重要な目抜き通りを煉瓦街にしたのです。いろいろな反対も多く、ほとんど市民と相談せずに、わずか1年半の工期でつくってしまったと。それでいろいろな反発も受けたということですが、もし大久保利通がああいうことにならず、オスマンのような役割をずっと続けていたら、日本のまちや銀座も変わっていたんだろうな、と思います。また、コラスさんの先ほどの話でもあったように、あれだけパリの大改造が当時、一番の参考例としてあったはずなのに、なぜイギリスの建築家を起用したのか、ということも面白いですね。薩英戦争以来、イギリスとのつながりが出来たこともあるし、非常に忙しい人だったと思うので、多分いろいろと外遊をしていてそれで、ちょっと食事をしてこいつがいい、あいつがいい、と決めただと思うん



ですね。なぜ、フランス人を選んで連れてこなかったのか、ということも、まちの運命を大きく分けるところだったのかな、と思います。

今日は3枚のスライドを持ってきました。それはまさに、コラスさんの話を補足するようなことですが、タイミングがいいときにご説明させていただきます。

見城 はい、わかりました。コラスさんは銀座の歴史を見せて下さいました。コラスさんご自身も、大変勉強しました、と先ほどおっしゃっていましたが、シャネルのビルをあそこに土地を買って建てよう、という一番の動機はなんだったのでしょうか？

コラス 東京には銀座しかない、ということは頭にあっただけですね。実際には、確か8年前に、私どもシャネルのオーナーとあそこに座っていらっしゃる和菓子屋の副社長と3人で、私たちは「物件を買うならどこにすべきか」ということを話し合う機会がありました。表参道、青山3丁目、代官山などいろいろなところがあがりましたが、最終的には「あそこでもない、ここでもない、あるとしたら唯一銀座、銀座だったら中央通りだ」ということで、ぶらぶらと歩いていたら、この素晴らしい中央通り、そしてマロニエ通り、そして非常に歴史のあるガス灯通りに出会いました。東京では初めてガスランプを持ってきた道があって、まったくの夢でしたが、そこだったらいいなと思いました。まさか、3年後にダイエーさんがその物件を売りに出そうとは、思っていなかったのですが。

30年前、私は学生でしたが、東京で一番最初に歩いたまちが、渋谷でも表参道でもなく、銀座でした。実際は、銀座の何が一番興味があったか、というと、ここのヤマハの1階の店で、クラシックレコード、当時はLPを買いにきていました。多分私は、日本の文化にどーんと入ってしまっていて、ただたまには自分のヨーロッパの文化を音楽経由で覚える、ということで、このヤマハに来ていたと思います。また日曜日にまちを歩けば、素敵な女性もいましたし、とても楽しいまちだった、というのがありました。だから結局その、まちの楽しさ、また目的がなくて来ても必ず何か見つける、ということで、我々は日本への一つの窓としてではなく、アジアへの一つの窓として、やはりこの銀座の中央通りしかない、と思っていたのです。

見城 銀座の方がお聞きになったらとてもうれしい、つまり他ではなくて銀座なんだ、



と。選び選ばれた関係がここにあるのですね。

たとえば昨日すごい台風がありまして、私は新潟におりまして雨風がひどくなる前に電車に乗って帰って帰ることができ、ここにいることができる、という状況なわけですが、その時感じたんですね。東京の今の状況は？ というと、渋谷が映る、もちろんNHKさんが渋谷にあるから、ということはあるのですが、確か渋谷や新宿が映って、銀座が映らなかったんです。

何かあると、テレビにぱっと映るのは渋谷だったりする。地方から大学入学で東京に来て、今大成している方に「どうして東京に来たかったのか？」を伺ってみると、「NHKのニュースで最後に渋谷の状況が映る。自分の住んでいるところはもう真っ暗で誰も動いていないのに、渋谷はあんなに動いているのか。悔しい、行くぞ、というので出てきた」というイメージを語られたことがあります。そういうことでは、若い人たちには東京のイメージが渋谷とか青山、新宿と時代とともに、変わってきているところがあると思います。その辺のギャップも含めて、かつての銀座、今の銀座、シャネル・コラスさんが選んで下さった銀座があるわけですが、その辺をもう少し詳しくお聞きしたいと思います。大内さん、いかがでしょう。

大内 非常に個人的なことですが、私自身の育ってきた昔を思い浮かべますと、自分一人では来られない幼い頃、銀座に行くのは、親よりもどちらかという祖父とでました。祖父はひげを生やして帽子を被ってステッキを持って、柳のところにそれがぴたり似合うわけです。ちょっとお茶を飲もうと、資生堂パーラーに連れて行ってもらうアイスクリームを食べる、というのがとっても嬉しいことでした。私の家は池田山にあって、母方の祖父母は大森におりまして、大森から銀座は近いと言えば近いし、遠いと言えば遠いのですが、大森駅のそばの不二家でアイスクリームを食べるのはあまり嬉しくなくて、銀座に来て食べるのはすごく嬉しかった。だから、イメージの中の銀座は、ある程度の年齢の人が、きちんとおしゃれをして、でもどこか遊び心があって、というものです。親同士、祖父たち同士の年代の人で遊んでいるかもしれないけれど、時に娘や孫を連れてきてくれて、なにかわからないけれど、いい気分させてくれる、それが銀座だな、というのが第一の印象でした。

やがて、私もだんだん自分のお金でいろいろなものが買える年代になってきました。だいぶ大昔のことですから、そんなに素晴らしい品物がいろいろありませんでした。私はひょんなことから、学生時代モデルのアルバイトの口がありまして、まちでスカ

ウトされたのですが、60年代70年代のモデルという仕事は、今とはまったく違っていて、靴やアクセサリはすべて自前のものを使うんです。だから、年中履いているような汚い靴じゃなくて、きちんとした最新トレンドの靴を持っていること、手袋やいろいろな種類のアクセサリをきちんと持っていて、デザイナーがうーんと言っていると、「これ、どうですか？」と言える、何かスタイリストみたいな役を果たすのがモデルでもありました。ですから、今に比べるとモデルにはいろいろな要素があって、お金がかかったんです。アルバイトで頂いたお金の99%はそういうものに、まあ好きでしたので買うことに使って……。青山学院の学生だったのですが、学校に行きながらアルバイトをして、アルバイトをしたお金のほとんどで靴を買って、学生の頃すでに100足くらい靴を持っているという感じでした。

その靴を買うとき、青山学院ですから渋谷が近いのですが、渋谷に行くのは絶対にいやなんです。やはり銀座なんですね。かねまつさんやサンモトヤマさんにはよく行きました。当時例えば靴一足、ブローチ一つが一万円した、ものもありました。50年代の終わりか60年代の初めとしては、もうめちゃくちゃな高い値段でしたが、本当にそれが欲しい。そういう素敵なものがあるという気持ちと、銀座とが、ものすごく結びついていました。渋谷にある雑多な安物じゃないんです。だから、銀座で安物をセールで売っているのを見た時、非常にがっかりして裏切られた気持ちがいたしました。そんなお店があると、隣のお店の人がお気の毒、と思いました。やはり銀座は、食べ物にしてもファッションにしても、それだけのレベルから上のものが置いてくれないと、いやなんです。銀座を銀ブラしながら、お店のウィンドウを見ながら歩いて、いいものを見つけて買う、というのが常でした。

その前後の頃、今ではご存知の方がいるかわかりませんが、クリスマスの頃というのは、みんなが銀座に行ったんです。何をするというわけではないのです。ただ銀座のまちを歩くだけで、なんであんなに嬉しかったのだろう、と思いますが、夜遅くまでただただ歩いて、とっても満ち足りた、いいクリスマスをやったような気がしたんです。他のまちではそういうことがなかったからだと思いますけれども、あの頃の自分が幼かったし、いろいろな意味で成長していなかったし、周りにいろいろなものがなかったこともあったかもしれませんが、銀座は他のまちに比べて、きらきらと輝いていて、そこに身を置くことで、ある種の緊張感と満足感。ある種の誇りと言いますか、自分は銀座にいるんだ、という誇りの満足感と言いますか、銀座は今もそういうものを感じられるまちであってほしいな、と思っています。

最近、いろいろなことで銀座にまいます、仕事でくることも非常に多くなりまして、そういったわくわくする気持ちじゃなくて銀座に来て銀座のまちを眺めると、なんだかちょっと物足りないんです。なんでこんなに物足りないだろう、と思いましたら、まず緑がないんです。表参道をよく見ますと、あそこは実は結構汚いんです。お店の並び方もバラバラですし、真っ赤なオリエンタルバザールがあるかと思えば、隣に新しいスカッとしたビルがあったり。しかも街路樹の根もとに、ゴミの袋がよく積んであります。にも関わらず、表参道って、なんとなく悪い気分じゃないんですよ。だから、みんな表参道に行きます。表参道がこんなになんとかゆったりした気分を与えてくれて、嫌な気分じゃなくていられるのは、やはり緑のせいだと思うんです。

銀座は地下鉄が走っているの地下に根をはれないし、ああいった大きな街路樹を植えられないのでしょうか。地下鉄のなかった時代に柳があったのでしょうか。銀座柳、と昔の歌が耳についてしまっているから、銀座という柳って思ふのかもしれませんが、言葉で言うほど柳って街路樹にあってなくて、素敵じゃないんですよ。下手すると、しょぼんとして幽霊が出たみたいになりますし。でも、柳という言葉は捨てたくない気がするので、柳という言葉を活かしながら、あまりしょぼんとなくて緑がある街路樹ができないものかな、と。そうすると、銀座を歩いていて、もつと緊張感を和らげてくれるんじゃないかな、と。

また、銀座を歩いていましてどこにもベンチがないし、ちょっと座って眺める、ということができませんよね。どこか憩える空間が欲しいな、と思うんです。また、これは私の個人的な趣味ですが、上を見ますと街路樹はありませんが、赤い看板がありますよね。もし皆様のお店で赤い看板の方がいらっしゃったらごめんなさい。赤い看板ってすごく汚いんですよ。私は青山に住んでいるので、青山の通りを見ます。青山通りというの、決して建物がきれいではないです。だけど、見ていて汚いな、という意識が比較的少なくすむんです。青山通りの方が、道は広いんですけど、決して景観は良くないんです。通るたびになぜかを考えてみたら、青山通りって割と真っ赤な看板が少ないんです。銀座に来ると、結構赤という色が出てくるんです、これで金がないからまだいいんですけど。これで赤と金だと、なんだかちょっと中国のまちみたいで。決して中国のまちがいけないわけではないのですが、ちょっといやだな、という気分になることが、とてもたくさんあります。

コラスさんの範疇ですけれども、シャンゼリゼではマクドナルドも色を変えましたね。だから、やっぱり何かこれは銀座に似つかわしくない、という色は排除していた



だけるといいなど、勝手に一消費者として、思いを抱いております。言い出すときりがなくて、長くなってしまうのですが。

見城 大変貴重なお話、ありがとうございます。ローマもそうですね、あのハンバーガー屋さんは石の色になって、一見分からず、よく見るとマークがあってわかるのですが。そのくらい色というのは重要で、他の東京に並ぶ都市は、色に敏感であり、高さや横への凹凸にも敏感で、日本は規制がゆるやかなゆえに、崩れるというか乱れてしまっている東京があり、銀座も少々そういうことが懸念されていると思うのですが、團さん、いかがでしょう。

團 色は本当に大切なことだと思うんですね。ただ、法律で決めすぎるのもどうかと思う。よく法律としてこの色はいけない、とあるひとつの場所をイメージしてつくったものが、日本全国のまちにいきわたってしまう。例えばアンケートで、どういう建物の色がいけないと思いますか？という項目があると、恐らくピンクは、良くないと答えられる色の一つだと思う。しかし、メキシコにルイス・バラガンという素晴らしい建築家がいる、ものすごく素晴らしいピンクを使うんですね。その使い方は、ざらざらとしたテクスチャーのスタッコの上に、少し紫に近いピンクを使ってる。一つの色が、全然違うコンテキストの中で、ものすごく上品に見えたり、下品に見えたりする、ということも一方であるので、法律を作るときには、それだけ慎重にしないといけない、と思っています。

それで、大内さんがさっきおっしゃった表参道の街路樹のことは、僕もまったくそう思うんですね。それと対極にあるのが、街路樹を持っていない銀座の中央通り。ある意味では建築のファサードがそのまますっきり出ている銀座のまちですね。それだけ、建築のファサードが担っている役割が、もっともっと大切なものになってきます。僕は、このままずっと表参道が、東京で一番代表的な通りになっていけば、世界や日本の通りをデザインする建築家が、全く街並みに対して役割を果たしていない、ということになる気がするんです。建物も、樹で隠せば、そこそこきれいに見えるわけですからね。ですから表参道がいい、ということは、街並みのデザインを建築的にまったく努力していない、ということなんですね。これから50年100年先に向けて、建物一つ一つのクオリティーは間違いなく上がっていくはずですけども、まち自体の意思というかコンセンサスが、全体の街路の空間として、一つの通りを造っている



のか。それはものすごく難しいけれど、樹で隠せばいいということよりも、はるかにチャレンジングなテーマをもっているのかな、と思います。

大内 そうですね。街並みそのものを比べてみると、確かに銀座の方がはるかに美しく、壁面も揃っているし、いろいろな意味で美しいんです。にも関わらず、居心地がほっとしていいのはどこだろう、とこの間からいろいろなところを立て考えたんです。それで、銀座がこれだけ美しいのに、なにか足りない、私の願うイメージが大きすぎるのかもしれませんが、何かが足りないというのを、この間から考えていました。まず、一番てっとり早く考えたのが、緑かな、と思ったわけです。

見城 大内さんがおっしゃる、何かが足りないというのは、例えば簡単に言うと、ベンチがあればいいんでしょうか？ たとえば、パリと言えはすぐ皆さんがカフェテラスというように、椅子が通りに並んでいて、私も初めてパリに行ったときに、こういう風に座るのかと驚きました。日本だったら、話をする人と向かい合って、通りに対して横に座り、通りは向こうにある、という感じですけれども、むしろ皆さんが通りに向かって座っているようなところがあって、本当にカルチャーショックだったんですね。やはり、それが恥ずかしくなくできる国民だからかな、と思っていたのですが、日本もだんだん変わってきていますね。

大内 今や日本も、そういうのがあたりまえになっていますよね。東京だけではなくて、日本中どこへ行ってもそうですよね。

コラス ただ、私は東京にカフェテラスができてよかったと思う反面、やっぱりマネなんですよ。自分のものになっていない。パリ風とかロンドン風とか、ニューヨーク風。ちょっと日本風を考えてくれない？ と思いますよね。では、日本風は何があるか、と言ったら、例えば福岡に行ったら、ラーメンの屋台があるでしょう。これは日本の文化なんですよ。では日本の文化の中にあるもので、どうやって新たなモダニティを表現するか、ということを考えればよいと思う。ただ、舶来のも、今は船じゃなくて飛行機で持ってきてマネをしよう、ということは、絶対にもうやめて頂きたいんですよ。日本なりの考え方で、何かを作って頂きたい。確かに、私もフランスでカフェに行って座れば、みんなが何を飲んでいるか見たり、きれいな女の子が来ると見たり、



フランスにいる時はフランス人としてやりますけれど、日本にいる時は遠慮してるんですよ。日本の文化があって、それを尊敬して、どうやるか、ということは、これからの銀座まちづくりの中では考えていったらどうかな、と思います。

大内 銀座ならではの路地がありますよね。あそこが何か日本風な憩える空間になりうるのではないのでしょうか。また、この路地でこう行くと通だとか、この道あんたたち知らないだろう、という一種の自慢になるわけです。その路地をただ知っているだけでなく、そこにいることが嬉しいみたいな、せっかくあるスペースを活かせることができないかな、といつも思うんです。そうすると、ただベンチを置いたからって憩えるというものではなくて、ある程度の年齢の方は休みたいから座るかもしれないけれど、決して美しい景観にはならないと思うんです。やっぱり座っている人も楽しいし、見ている人も楽しいと思わなくちゃ。路地だったら、座っている人も嬉しいし、そんなにみんなが見ないから年寄りが座っていたっていいと思うし。何か路地というのを、もっと素敵にできたら嬉しいな、と思います。

見城 大変いいご指摘だと思うんですね。仕事から全国に参りますと、各県庁所在地の商店街が、軒並みしずんでおります。いろいろな補助金を使い、都市再生を願って商店街の活性化計画とか、いろいろなことをされていますが、ほとんどベンチは死んでおります。ベンチを置いてみたり、車がここを素通りしないために、少しアールを描いて道を造ってみるというようなことをされているのを拝見するのですが、結局ただ車が混むだけだったり、車を入れなくすると人が来なくなったりしています。後追いというか、これはどうかと思ってやるのが、住民や訪れる人の快適さにつながらない、というボタンの掛け違いみたいなことが、たびたび起こるんですね。その最たるものが、私はベンチだと思っています。ですからあえてベンチがあればいいんですか？と伺ったのですが、どうも違うようですね。どうぞ銀座の皆さんも、そのあたりよろしく願いいたします。團さん、どうでしょう？

團 戦後戦前も含めて、道路がどのように造られたのか、ということが関係あると思う。日本では、田んぼの中にみちがあって、道路ができてから周りのまちができてくる、という、そういう道路とまちとの関係が原点にありすぎる気がする。パリのブルバールのように、街路と両側の建物のファサードと、そこに面した広い歩道が一体になっ

て、街路というのは、ものを考えたり人がいる場所だったり、それで散歩を楽しんだり、車もそこを通過して、いろいろな人がいる場所ということ。戦後の復興の際に、日本の官僚機構は、とにかく1kmでも多く、車のため輸送のための道路を、と言って造るシステムががっちりできすぎてしまった。しかし、今では道路をつくる部署も、必ずしも交通のためだけではなくて、人間の生活に対しての細長いインテリアスペースだと、考え方が変わってきています。

先ほど大内さんがおっしゃった路地ですけれども、魅力的な路地の多くは、違法行為を犯しているところですね。違法行為のところに魅力的なものが発生しやすい、という仮説もあるかな、と思っているんです。たとえば、狭い路地に、自分の庭先・玄関から境界を越えて緑を置いたり。また、八百屋さんが自分の店の外にいろいろなものを出している。それがひとつにぎわいを出している。それは行政的に見ればもちろんいけないことです。でも待てよ、と考えてみると、魅力的な境界が案外そういうところで生まれている。そのことを考えると、多くのヒントを与えてくれますし、いろいろな社会実験的なことをやっていくべきだと思います。銀座はそういう意味では、街路が単なる車の通過ということになっていないまちですよ。

ここでスライドをお見せしたいと思います。これは広重の描いた、江戸百景の中の街路です。両側のファサードがあって街路がある、というのはパリだけのものではなくて、実は江戸の頃にも日本に立派にあったわけですね。これを見て思うのは、両側のファサードはこの道路と一体になっている、ということです。ここは長屋として計画されたところですから、建物の外壁は街路と一体になって整備されたのだらうと思いますけれども、今の日本のシステムだと一個一個の建物は、その個人の所有者の顔です。だから、おもちゃ箱をひっくり返したように、俺だ俺だ、というビルが並んじやうののですが、では誰がそこの通りの顔を考えるのか。今まさにそこですよ。こういったある意味でまちの美しい背景にもなるような街路というものが、この頃つくられてきた。やはり道路を両側の一かわの建物も含めて考えるということの現れだだと思います。

次のスライドは、パリです。わずか150年前にセーヌ県知事のオスマンがやった計画は、ナポレオン3世の時代の計画でしたから、ほとんど今の法制度と大きくは変わらない。ルイ14世の時代とは違って、行政が強引なことをしたら行政も訴えられる、そういう時代です。ただ、一つだけ強制修容法というのをを使って、両側の街路を全部収容して行って、行政施行で、つまりパリ市が自分のお金で買い取って、自分のお金



で一個一個の建物を建てて、払い下げをやりました。以前は木造もある程度ありましたから、改造後は狭いと文句が多く出ました。しかし、こういうブルーバールにすると、1階のお店が成功することがわかってきて、どんどん延ばしてくれ、ということになりました。ディベロッパーとしてのパリ市も黒字が増えてきて、パリ市の財政黒字が10倍にまでなった。だから、このパリ市の改造計画は、強制的にやったものではなくて、とても資本主義的に、人気を博したから延びていったということがある。この両側を統一的に考える、ということは、もう少し日本のまちにできてほしいなと思う。

見城 このスライドを2・3秒拝見してから目を閉じて、はっきりとスカイラインや道路のラインがきっちり浮かびます。イメージがぱっとつかめますね。

團 これは一つの提案ですが、例えば交差点の4つ角にあるビル。向こう三軒両隣とか、コーナーに立っている土地所有者の方が一緒になって、一つの交差点をデザインしようじゃないかと。そうすると、そのまちの交差点が非常にいいスクエアになる。そうしたら、税の控除を受けられるとか、何かインセンティブを土地制度の中で出して行く。あるいは、道路の向こうとこちらが連携して、統一的なデザインにしようとか。同じデザインを全部べたっとやるのがいいとは思わないです。ただ、あまりにもバラバラなので、少しそういうシステムを加えたらどうかな、と思います。

最後のスライドは、世界で最初の都市再開発のプランです。ル・コルビュジエがパリに対して提案した、1920年代後半の「300万人のためのパリの計画」。ルーブルがこの部分で、ここにセーヌが流れている。パリの大半にコルビュジエは高層を建てる、そうすれば足もとにこれだけの公園が広がるではないか、そしてパリの大半の街区をこのように壊す、こういった提案をしたんです。ここに住んでいる人口と、このベタとした今の部分に住んでいる人口は同じなんだ、こっちの方が緑が多いではないか、という論理だったんですね。我々はグラウンドという言葉を使うのですが、平たい建物がグラウンドであったのに対して、コルビュジエの案だと地面がグラウンドで、反転した計画です。これはなかなか接続がうまく行かなくて、古いものと新しいものとはケンカしてしまう、というのがこれを見るとよくわかります。幸運なことに、パリは1920年に、この案にNOという答えを出している。そのことによって、現在のパリが保たれています。しかし、高層ビルは、やはり現在の象徴としてどう考えるか、と

いう時に、ルーブルからずっと彼方の軸線上のシャンゼリゼのデファンスにだけ長だけ高層ビルを建てるといふ、そういう都市としての大人の判断をした。だから、どこにでも高層ビルを建てればいいのではなくて、いろいろな議論の末、パリもかつてこういう大変歴史的な決断を下した時期があったわけだから、銀座もまさにこれからどうするか、ということを経済的議論して行くことが大切なんじゃないかと思ひます。

見城 ル・コルビュジエという建築家は、簡単に言ひますと高床式みたいな形でコンクリートで建築を建てて、その下をもっと公共の、広場に使えたり、緑も植えられたりするものにしよう、という、そういう考え方なんです。

團 僕は大変コルビュジエが好きなんです。しかし、彼の提案した都市デザインというものは、ちょっと今のパリを壊しちゃうかな、と思ひます。

見城 パリには向かなかったということですね。都市とか街並といったことに関心のある方はごらんになったかと思ひますが、六本木ヒルズがオープンしたときに、都市展という形で、各国の都市がどのように形づけられてきたかという模型を展示しました。航空写真で撮ったものを一つ一つ全部モデルをつくって、立体的にして、都市がどのようになっているかということを経済的に一目で見られるような形の模型が展示されておりました。團さんがおっしゃったように、パリの場合は今までのパリがあつてそこではつくれないから、ということで、凱旋門から一直線に延ばしたところに高層ビルの群れをつくったと、はっきりとコンセプトがわかる模型でした。ロンドンの場合では古い街並みにとつてもうまい具合に、歯を抜いて差し歯をするような感じに、うまく新しい建物を入れているんですね。しかし、それが今までの建物と調和するような形で入っている、というのが大変印象的でした。

いろいろな都市を見て、最後に東京がきた瞬間、絶句してしまいました。ただただ白っぽい貝殻をちりばめてしまったように、ごちゃごちゃとしていて、これはどういうコンセプトで説明したらいいのか、という状況でした。でももう現状としてこうなつてしまった。しかし、銀座がもしこれから未来に向かってつくっていくんだ、としたら、未来はあるわけですね。その辺を皆さんからお話を伺いたいと思ひます。どなたからでも、どうぞ。



團 フランス人のつくるまちと、イギリス人のつくるまちとは、まったく違う考え方だと思います。1667年にロンドン大火が起きて、その時にロンドンにはいろいろな人がいて、ヨーロッパの“おでき”と呼ばれるような、とにかく汚くて不衛生。それが燃えてしまった。その時にクリストファー・レンという英国NO.1の建築家が、その火事が燃えている2週間のあいだに再建計画案を作成した。しかし英国人の保守性のために、それはダメだということになった。結局木造のロンドンを石造には変えられども、彼のプランは採用されなかったんですね。ですから、同じものをまた再建した。ですからロンドンのまちというのは、まちのわかりやすさという点では、パリに比べると、今でも少しわかりにくくて、東京に似ているところがある気がします。ただ、パリもまた、オスマンのような人が出てきて再編成したから、ああいったクリアなものになったので、それぞれの歴史と文化の切断面が今の都市なのだという理解をもつべきです。アジアの代表的なまちとして、日本のまちをどうしていくべきか、ということをやはりいよいよ出す時期に来ているのかな、と思います。

見城 先ほどコラスさんも、パリのマネをするのではなくて、日本的なるものを、とおっしゃいましたけれど、これがなかなか、和洋折衷になるとまったくダメになりますし、難しいんですよ。そうすると、どんなイメージがありますか？ 博多の屋台はいろいろな反対がありながらも、あそこの屋台のイメージであります。この銀座ではどうなのでしょう。

コラス まず、東京というまちを外国人がどう見ているか、ですね。皆さんは東京が大好きなまちです。なぜ大好きかという、ある意味でごちゃごちゃのまちだからこそ好き。片方に大きい道があって、2～3分歩いたら、猫くらいは差し込めるような路地があって、そこに非常に魅力的な小さな家が残っていて、緑がちよろっとある。もうちょっと中に行くと小さなレストランがあって。そういうことで、これはフランス人イギリス人に限らず、外国人が、東京は素晴らしいまちだと言うんですね。

まず、その素晴らしいところは守らなくてはいけないと思います。だから、私は東京のごちゃごちゃを守ってほしい。あるところで、何かこれは名前を言わなくてもわかるでしょうが、これから東京はバーティカル化しなくてはならないと言っています。しかし、人口が減少していくのにバーティカルなまちをつくる必要はないと思います。

高い建物に住んで、地震があると揺れますね。日本人は高いビルに住むのが、歴史

的にも苦手です。コルビュジエが1920年代に考えたことを今やるのは、100年遅れの考え方だと思うんですね。東京はバーティカルなまちではない、水平なまち。膨大なまち。そのためにはごちゃごちゃ。そのためには大きな道があっても、小さな路地があって、それぞれのキャラクターがある、それぞれの職人が集まったキャラクター、味が残っている。私は銀座にはそのような感じを残したらどうかな、と思う。銀座としていちばんして頂きたいことは、先ほど、シャネルのパラフェクション・カンパニーを見せたじゃない？ その日本の、銀座のパラフェクションをつくってほしい。例えば、銀座に伝統的にある歌舞伎座がなくなったら、銀座はダメ。後は昔からある和紙のお店がなくなったら銀座はダメ。

コラスは何を言っているんだ、お前はシャネルを作っているじゃないか、と言われてそうですが、我々があってもいいんだけど、でもそのバランスということですね。だから伝統とモダニティー。それは東京であることを、守らなくてはいけません。

私は、フランス人を世界一わがまま、エゴイストな民族だと思っていたら、日本に来たら、いやフランス人よりはわがままな人がいるのが日本人だ、とわかりました。結局、自分のところで自分が好きなようにつくっておいて、隣がどうするかと見たくない。一つだけ日本人に言いたいことは、隣には口を挟むな、文句を言わないでくれ、と。自分が勝手に自分のものをつくって、隣がつくるときにはあれはどうだ、このロゴは大きすぎるとか、ああいってエッフェルタワーは良くないとか。ちょっといい加減にしてほしい。自分が隣でやっていることはおかしいからね。ただ、そういったごちゃごちゃ性こそが、不思議なことで、非常に魅力があると思う。だから、銀座がこれからオスマンみたいな人を呼んで、が一つつくるということではなくて、銀座のリズムがある。実際日本に都市計画の歴史的にはないわけじゃなくて、1960年代からはある。それなりの歴史を守りながらやってほしい。博多の長浜ラーメンを銀座に持ってこよう、とは言わないけれど、團先生が見せてくれた広重の雰囲気、なんらかの形で、モダニティーを取り入れながら、つくって頂けたらいいと思う。言うのは簡単で、これからどうしよう、というのは難しいけれど、でもどこかに伝統・歴史・モダニティー、一緒に混ぜながら、そのバランスをキープしながらやっていったらどうかな、と。これは法律ではないんです。国民の、市民の、住民やその辺にいる人が一緒に考えるまちづくりじゃないかと思います。

見城 大変先ほどから重要なポイントが出ていると思います。大内さんからは、路地



ということが出てきましたし、今のお話も、大通りから一つ中に入ったら路地がある東京の魅力ということでした。

実は私も、今日のシンポジウムのために、ここのところ雨の銀座、夜の銀座、時間を変えて何度も銀座に足を運んでいます。どんな人が歩いているのか、観光客だと結構アジアの方も多いな、とか、通りすがりの声を聞いてこの人たちがここに本当にいいと感じてくれるまちって何だろうか、そんな気持ちで歩いていました。実感からすると、銀座はかつて、一つ中に入った通りにそれぞれお好みがあって楽しかったと思うのですが、その辺が少し界限とか路地という意味が、うすまっていますか？ どうでしょう。

大内 そうですね。でも今例えば並木通りのブランドがびっしりあるあの華やぎや、通りによって結構個性がありますよね。見城さんがおっしゃったテーマと少しずれるかもしれませんが、路地みたいな狭いところで楽しむと同時に、たとえば松坂屋さんの高層建築という問題が随分話題をよんでいます。私はあそこにドーンと高い建物が建ってしまったら、空が遮られてしまってイヤだなあ、ともちろん思います。もう一つ嫌なのは、ビル風がどう回るのか。汐留のこともそう言われていますが、高い建物も建つと周辺がビル風でえらい迷惑するわけです。銀ブラどころの騒ぎじゃなくなる、ということもあるわけですね。そういったことを解決した上で、銀座・日本独特のいろいろなものが一緒に同居しているという要素として、もし高い建物になる代わりに、その中には何か楽しい、それこそゆっくりできる公園みたいなスペースがあったりしても、悪くはないかもしれないな、という気はするんです。

全部が全部日本的になればいいとか、路地を活用すればいいとか、ベンチを置けばいい、なんて簡単なものではなくて、日本ってどっちにしてもいろいろなものが自然に混ざっちゃう性格を持っているので、一概に高いビル建物反対、というのもどうかな、と思います。高さによりますけれども。

というのは、たとえばニューヨークで5thを歩いているとトランプタワーがありますよね。キンキンギラギラで、ニューリッチの象徴みたいな感じがして。決して好きじゃないんです。でも、必ず入ってみるんです。それでエスカレーターで上がってみると噴水があったりして、何か二度と行かないと思うんだけど、行くたびに必ずのぞいてしまって、ついでにお店ものぞいていらない物まで買っちゃったりします。悪趣味とか言いながら、あのスペースってなんだろう、とよく思います。もったきれい



なビルで1階をガラス張りにして、真ん中に大きなグリーンを植えて、スカーツとしているところも他の通りにありますよね。そこに行って座っているかという、あんまり座っている気がしません。だけど、トランプタワーに行くと、ギンギラねえなんて言いながら、つい寄ってしまう。あれは、5thの行きやすい場所にあるからだけかなあ、と思います。

何も悪趣味なものをつくってくれなんて言いませんし、高さの限度もありますし、ビル風の問題もいろいろなそういったものをクリアして、ちょっとスペース的にゆとりがあって、何かまた銀座の新しい面の遊び心みたいなものを加えられることがもしできたら、それはそれで銀座の伝統と発展というか改革というか、そういう部分になりうるかもしれないな、と思うんです。施工なざる、お金を出す方々がどうお考えになられるかもありますけれど、それは銀座の皆様がぎゅっと圧力をかけてやる権利はあると思うんですよね。しばしばそんなことも考えます。

見城 どうでしょう、團さん。

團 僕は学生の頃は、銀座は高いまちで、あまり学生が来ると言う感じはしなかったのですが、よくよく思い出してみると、葉山に住んでいましたので、うちの親父が夕方になると銀座にのみに行く。当時横須賀線の終電で帰ってきていました。銀座で何をしていたのかな、と亡くなった後なつかしくなりまして、なんとはなしに、自分の前の世代の人が歩いていた街ということで、また自分も夜の銀座を年齢的に歩けるようになったかなと思いながら歩いています。今日も先ほどお目にかかった山岡さんのように、父が昔からお世話になっていた方にお会いできたりとか。銀座は、単発的に短いつきあいのまちではなくて、2代とか3代とかそういったタイムスパンでおつきあいするまちなのかな、と僕は思います。

僕も、先ほどコラスさんがおっしゃったように、個々の自由もあり、しかしある程度のルールもある、というそのバランスが必要だと思うんですね。料理に例えると、ブイヤベースみたいに、いろいろな具が入っていて、そこに一つおいしいスープという、バラバラなんだけれどもいい味が出てくるような。しかし、そのためには一個一個の建物の質がどんどんおもしろく、良くなっていかないといけない。昔から日本をリードして、銀座の建物は一つ一つよくできていると思う。目立たないところで非常にきちんとつくっている、そういった文化を持っているところだと思う。また、マク

ロに見たときに、中層で水平方向に広がった街区になっている。街区という言葉はやはりこの銀座から始まったと思います。大久保利通の銀座煉瓦街というのは、日本で最初の街区の設計ですよね。その街区という言葉の発祥の地ですね。だから、僕はその街区というものの、高さやルールは守って行くべきじゃないかな、と思います。その中で一つ一つの建築物を豊かにすることが重要で、あんまり統一性をとりすぎて、それこそオスマンのパリのようにする必要もない。いろいろなバリエーションを持ちながら、大きなルールは貫いていかれた方がいいのかな、とそんなふうに思います。

自分の前の代の人間が空気を吸って、歩いていた、というのは何か不思議な感覚です。そういった同じ空気を吸っているというところから、なんとなく愛着が出てくると思う、そういう一つの入れ物としてのまちというか、僕だけじゃなくて、多分多くの方々が、そういう愛着を持っているまちの代表じゃないかと思いますね。

見城 今團さんから、銀座への熱い思いも語って頂きました。1代限りのようなものではない、それは本当に一瞬通って大変気に入るという方も、これからにつながるわけですが、1代2代と代を重ねて銀座に愛着を持っていける、そういうまちであってほしいと。これは一つのコンセプトとして大事だと思いますね。

そろそろお時間ですので、最後に一言ずつお願いしたいと思います。皆さんの銀座に対するいろいろな思いを伺いましたけれども、でもこれは！ということの一つ、お願い致します。

コラス 我々が銀座に出てみると、まちのなかには銀座通連合会とかマロニエストリートの連合会とか、いろいろなアソシエーションがあって、なかでもびっくりしたことは皆様方が大変歴史を持っていらっしゃるということです。2代目3代目4代目、もしくは6代目という方がいらっしゃいます。これから銀座というまちを尊敬しながら、我々もまったくの新米として、皆さんにおんぶにだっこしていただくこととなります。世界のチャンネルではなくて、銀座のチャンネルになるように努力して、皆様から学んでやっていきたいと思っています。

同じようにやはりまちをリスペクトする、基本的な考え方を持っていた方がいいのではないかと思います。うちの建築家は、この企画に入った時、まずこのまちを行ったり来たりずっと歩いていたんです。「何をやっているの？」と聞いたら、「これから私がつくるものは、でもこのまちを尊敬した建物をつくらなくちゃ」と言いました。

自分の場所だし、あんな高い値段で買ったんだから、好きなものを好きなようにつくれるんじゃないかと思うんですけれども、そうではなくて、どこかでやっぱりこのまちの全体を考える。といいながら新しい建物は銀座に今までなかったものですが、でも自分につけたいろいろな規則、ルールでもない行政でもない、自らつけた規則によって、この建物は銀座だからこの建物になったと思います。

これから新しくこのまちを計画なさる方も、やはりまちを尊敬しながら、まちを歩いて、何代も前からいらっしゃる方の話を聞きながら、尊敬しながら、そういうことをして頂きたい。またぜひとも銀座のパラフェクションをつくって頂きたい、と思います。ありがとうございました。

大内 皆様のお話を聞きながら、銀座って私にとってあるいは他の人にとって何だろうと考えたとき、他のまちと全然違うのは、日本中の人、少なくとも東京中の人、例えどこに住んでいようとも、銀座は銀座に住んでいる人のものじゃなくて、私のものだ、私たちのものだ、という意識がとても強いということです。例えば新宿に行った時は違和感があっても、銀座に来た時は何か自分のまち、年中来ているわけでも、自分のという意識が他のまちと違って特別強いのが、銀座だと思います。ですから、銀座の皆様のご意見と同時に、田舎者で銀座とは関係ないよ、という人を含めた意見をくんで、よりよいまちにして頂きたい、と心からお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

團 世界中の、あるいは日本全国から一つの建物の設計を依頼された建築家がきても、銀座に来たら銀座のルールとかイメージというものを研究して、まちに対する答えを出す、というような、そういうまちが多分いいまちになっていくんだろう、と思います。だから、鋭敏な人は一個一個の建物を観察すると、「あ、ここがちょっと違うな」と銀座特有のスタイルを持っていることがわかるんだろうけれども。これから今後の銀座がどんなまちの転換をしていったらいいのか、いろいろな議論が出てくると思いますけれども、そういうものの蓄積によってだんだん良くなって行く、そういうまちにぜひなって行って頂きたい。また、それは、まちの素晴らしい方々が中心になって、まちの意思を持つということなんじゃないかと思います。銀座がいつまでもみんなの街の顔として、さらに魅力的になって行ってほしいな、と思います。



見城 ありがとうございます。コラスさんの素晴らしいご講演に始まって、それぞれの皆さんのいろいろな話ができました。粋という言葉もキーワードだと思うんですね。やはり、江戸前という言葉があるように、今すぐく江戸がアピールしていますが、江戸の頃にあるものがつくられて、それを日本人が好きだったし、それを粋と認めた価値観がそこにあるのではないかと思います。例えば、ここが海に近い、江戸前なんだということも忘れていきますよね。そういうことは、銀座は思い出させて下さるのでしょうか。例えば、鹿児島湾と東京湾、どちらが魚が捕れますか？普通皆さんは鹿児島湾だ、とおっしゃいますけれども、あそこは火山の爆発でできた湾ですから、漁獲量も魚の種類も少ない。東京湾には16本の川が入っているので、汽水域が豊かで、魚も種類が豊富。水辺の文化があったということも、少し忘れかけていますね。なぜ江戸前はあんなに華やかな文化になったか、というと素晴らしい16本の川が入ってきて、その海べりができた、その潮風も受けながらここに素晴らしい銀座がずっと育ってきたんだ、ということも重要なのではないかと思います。境界をつくってきた歴史も、どうぞこの段階でもう一度ひもとして頂きまして、あらゆる面から、失ってほしくないと思っさんが思っらっしゃるものがそれぞれにあったと思います。こういうところを汲み取って頂いて、新しい銀座をつくって頂けたら、と思います。

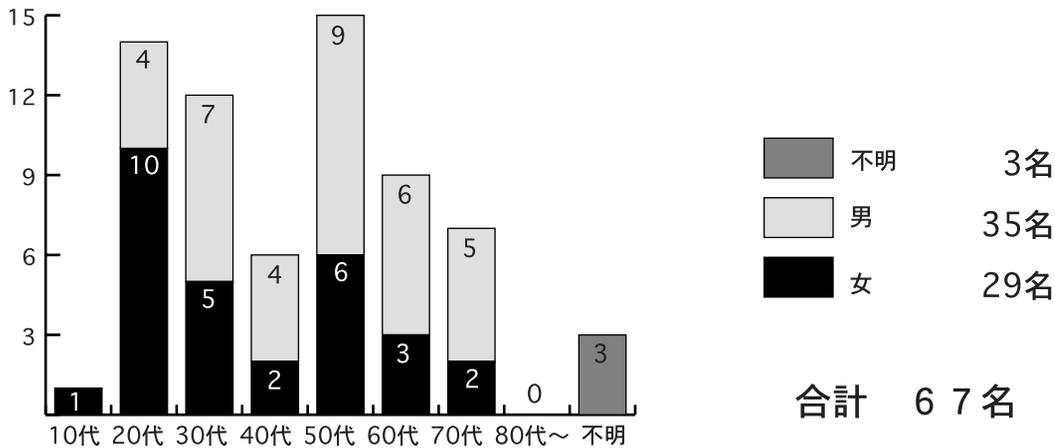
皆さんのお話の中にも記憶として、團さんはお父さんの記憶、大内さんは素晴らしい本物のセレブの記憶というのがこの銀座にありました。コラスさんは初めて日本に来てから、この銀座を愛して下さっている。そこに素晴らしいチャンネルを出して下さい。そういった過去の記憶、これをもう一度一つポイントにしたいと思っています。文化の3つの条件「過去の記憶」「現在の記録」。どんなことを現在やってきているのか、今しているのか。そして3つめは「未来の予感」。この3つが揃って文化なんだそうです。銀座には本当に素晴らしい過去の記憶があり、現在刻々と素晴らしいブランド店が出てくる、そして老舗の方が本当の銀座をつくっている、この記録。そして、では未来はどんな予感があるのでしょうか。それを期待致しまして、このシンポジウムを終わらせていただきます。どうぞ皆さん拍手をお願い致します。コラスさん、本当にありがとうございました。大内さん、團さん、ありがとうございました。

竹沢 どうもありがとうございました。改めて拍手をお願い致します。耳の痛いお話もありましたが、しかし銀座への応援と言いますか、愛を込めた提案を頂けたような気が致します。

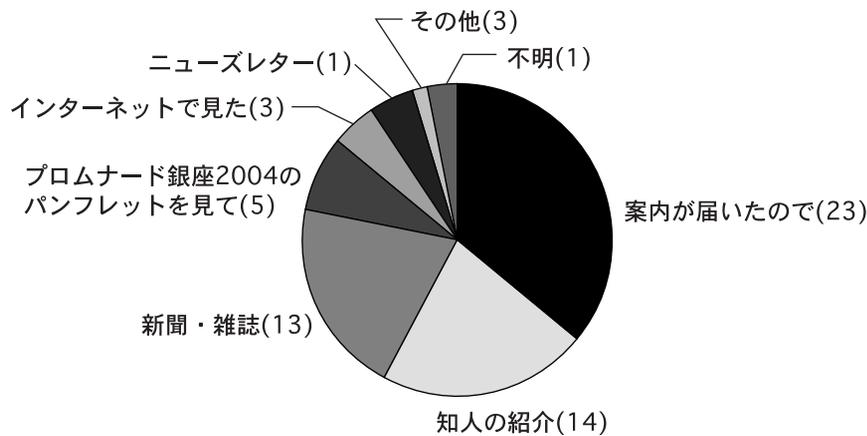
銀座街づくり会議におきましては、これまでもさまざまなシンポジウムをやって参りました。これまでの記録が今ロビーにありますので、ぜひお手にとって見て頂きたいと思います。これからも、シンポジウムを続けてやっていきたいと思ひますし、先生方や会場にいらっしゃる皆さん、銀座を愛して下さる皆さんからのご意見を、少しでも聞いていきたいと思っておりますので、お手元にお配りしているアンケートを、今ではなくファックスでも構いませんので、送っていただければと思ひます。そういった意見を活かしながら、もっともっと良い銀座まちづくりを今日のご意見も肝に命じて、やっていきたいと思っております。どうぞよろしくお願ひ致します。本日は、どうもありがとうございました。

■来場者アンケート集計結果■

★回答者について



Q1：あなたはこのシンポジウムをどこでお知りになりましたか？



Q2：どんなところに興味を惹かれて、参加をお決めになりましたか？

内容に興味があった	52
出演者に興味があった	27
その他	8

(複数回答あり)

《回答例》内容に興味があった

- ・銀座のまちの今後の展開・方向性に興味があるので。(9)
- ・「まちづくり」に興味がある。自分なりの考えをもっている。(6)
- ・銀座が世界的にどう評価されているのか。国際的な視点で見た銀座が知りたくて。(5)
- ・銀座が好きで、思い入れがあるので。(5)
- ・チャンネルの見る銀座、何を考えて銀座に出店したのかに興味をもって。(3)
- ・日本の中心地、伝統あるモダン都市としての銀座の今後に期待をしているので。(3)
- ・銀座と企業の在り方について。「銀座らしさ」とはということか。(3)
- ・ヨーロッパ等、世界の他の都市を見比べ、銀座ならではの魅力・開発に興味を持った。(2)
- ・プレステージ・ブランドが考えるまちづくりについて。

《回答例》出演者に興味があった

リシャル・コラス

- ・ 海外進出ブランドのトップがどう銀座を考えているのか。(2)
- ・ フランス人の視点からどう見られているのか興味深かった。
- ・ シャネルのビルの建設工事を見ていて気になったので。

大内順子・團紀彦

- ・ パネルディスカッションのお話か、と興味をもって。

その他

- ・ それぞれ名前の通った方々なのでそれなりの興味で。
- ・ ファッション性をもった出演者だったので。

《回答例》その他

- ・ どの国のブランドショップも紋切り型になりがちなので、日本文化を織り交ぜながら、独自の都市をつくりあげていけたらと思う。
- ・ 卒業論文で銀座のまちづくりについて研究しているため。貴重な話を伺えるのではないかと考えた。
- ・ 自分自身、銀座の遺産を利用して何かしたい。
- ・ 世界の銀座にしたいから。
- ・ 調査・研究の一環としてぜひ聞きたかった。

Q 3 : 本日の感想がございましたら、お願い致します。

■銀座・まちづくりに対する意見

- ・ 出演者から銀座の魅力を話して頂き、将来の銀座への希望が出たが、最終的に将来の銀座像は銀座人(全銀座会)が決めなくてはならない、という重大性を感じた。
- ・ 銀座百点・ポルトパロール・銀座十五番街等の情報誌をこれまでも手にしてきたが、今後様々な銀座のイベントにより親しみつつ参加できそう。銀座の歴史も改めて知ることとなった。
- ・ 今までにない視点でのまちづくりが銀座で起きると良いと思った。
- ・ 日本の良いところについて、日本人が気づいていないと感じた。キレイとステキは違う。銀座はキレイだとは思わないが、ステキなまちだと思う。キレイではないが、ここにある大人の魅力(学生には壁だが)は消えてしまわないでほしい。
- ・ 仕事柄、自分で役に立てることはないかを改めて考えたいと思う。
- ・ 銀座の人も答えが出てくるのを待っているのではなく、自分のことをぶつけあう時間だと思う。
- ・ 銀座を知らなかったなので、今日をきっかけに銀座をもっと知っていきたいと思う。また、大人のまちというイメージがあり、しかし時代と共に銀座も変わっていく中で、自分は何をしていけばいいのだろうと思った。
- ・ かつての銀座の文化と今の銀座の文化と異なった新旧文化の混じり合った銀座とはどのようなものなのか、考えてみたいと思った。
- ・ 銀座にいとおいさを感じた。人間の歴史とともにあるまちの良さを改めて知った。ヨーロッパ的雰囲気は銀座にはある。あまりにも高級なまちであるより、路地の良さ・人肌の良さも残してほしいし、その方が銀座らしいと思う。

・「街が出来る」のではなく、「街を創る」ことの重要性を感じている。世界に誇る日本の街として、銀座をどのように創るのか、これにつけた大筋のルール(規則)と個的表現のバランスをどこにとるのか、どのように合意し、守るか。

・現代の横丁を考えることが、かねてより大事と考えていた。看板を廃止すれば、ファサードデザインが活かされるのではないか。

・一つの街の文化が、日本の未来のまちづくりの基となるのではないか。人の心に豊かさを育ててくれる“ほんもの”“伝統”にふれられる銀座、いいまちにしていってほしい。

・コラス氏は、銀座と六本木を比較し、銀座は「界限空間」だと表現した。しかし近頃の銀座は「まちの集客率」に「店舗の集客率」が迫っていると、個人的には感じる。見城さんの「渋谷新宿と比較しての銀座」に関する問いかけには共感した。コラス氏のいう「界限空間」とは、メンタルな魅力を感じられるような空間を意味すると思われるが、そういった意味でも「世界都市」としては、京都の方が圧倒的な存在感を感じる。つまり、今の銀座は「店舗の集客率(Physical)」な魅力ばかりが充実してきて、メンタルな部分が浪費され、過去のイメージのみで生き残っているまちに感じてしまう。

・コラス氏の話は素晴らしかったが、銀座の歴史や仕組みを外国人から聞くのは辛かった。地元にも研究されている方はたくさんいるのに。「街づくり会議」がこのようなシンポジウムの機会をつくって下さったことには感謝するが、もっと地元の人が問題を直視し、アイデアを出し合えるような場が必要だと思う。今、銀座は学術的なサジェスションより、実態を知る銀座の人の意識のまとまりが必要なのではないだろうか。何をして、誰に伝え、どういう力にしていけるか、考えていきたい。

・日本のまちとして誇りがもてた。いいまち再認識。

・大変よい企画。日頃考えていた事柄の論議がされ、興味深かった。

■出演者に対する感想

・本日の企画は大変素晴らしく、また拝聴できたのは貴重な体験となった。コラス社長の講演の中で最も印象に残った言葉は、「日本は残すのに理由がある。欧州では壊すのに理由がある」。シャネルが銀座に加わることによるChanceとPowerをこれからも支援したいと思う。

・シャネルとしてだけでなく、まちづくりについても広く考えを持っていることに大変感動した。こういった銀座のまちづくり活動は大変良いことだと思う。

・世界に誇るブランドをもつ企業は、自分のショップのみでなく、街全体のことを広域的に考えていることが分かり感心した。そういった企業と公的機関の融合があるととても良いと思う。

・銀座における外資系ブランドショップの進出に対して否定的な意見をもっていたが、「伝統と革新」を大切にするという意味では実はとてもよく似ており、新しい銀座のまちの魅力を創出するものになるのではないかと考え方が変わった。

・シャネル、コラス氏の親日性。言葉・歴史への努力に対し、銀座に対する熱意を感じ安心した。銀座を一層大切にしたい。

・ブランドは理念によって支えられていることを強く感じ取った。

・コラスさんのプレゼンは本当に楽しかった。シャネルの経営戦略が都市戦略に充分変換されていて、勉強になった。

・コラス氏のお話は興味深かった。江戸時代からの歴史の中で、銀座に日本的伝統と特色をどう活かしていくか、難しいが必要なことと思う。

・シャネルですら銀座のまちを考え、溶け込もうとしている。このような動きを感じながら仕事のできる楽しさを感じていたい。

・コラス氏の話がとてもわかりやすく、ユーモアも交えながらわかりやすかった。銀座の老舗と新店舗が一緒にいいまちを作っていってほしい。

・リシャール・コラス氏の講演、パネルディスカッションが全体的をえた内容で感心しました。外国人から日本文化や銀座の良さを教えられる現実、他の分野でも見られる。これまでの講演会にも出席したが、本日のコラス氏のものは出色。本質を的確に捉えていた。

・ リシャール・コラスさんの話が大変おもしろかった。銀座の中にいると、なかなか客観的な意見を聞く機会がないので、参考になった。

・ 「東京のごちゃごちゃさを守る」という考え方が素晴らしいと思う。

・ 諸先生方のお話それぞれが興味深く、大変勉強になった。特に大内先生が、自然・路地裏について話されたが、自然との共生をどう考えていったらよいのかを考えさせられた。

・ エキサイティング。物事をふまえた上での自分の感性、意見が明確で素晴らしかった。團氏の意見、見城氏のまとめも秀逸。大内氏のトランプタワーの話もおもしろい。

・ それぞれのパネラーのお話がとても良かった。皆さん銀座を愛している思いが伝わった。私も銀座が大好きです。

・ 銀座に対する思いがそれぞれのゲストの方によって異なっていたが、皆さん銀座に対するイメージがあり、それぞれの異なるお話しを聞くことができ、満足。

■シンポジウムに対する感想

・ 会場の意見を聞く場面があってもよかったのでは？

・ 銀座に長く住んでいる(または住んでいた)都市ジャーナリストのような人もパネラーにいた方がよかったのではないかと。・ 銀座街づくり会議側からのパネラーの方もいらしたら、さらにおもしろかったのでは。

・ パネルディスカッションの内容が、テーマである「世界都市のなかの銀座 一本物に出会えるまち」とは合っていないように思われる。

・ 地元の長老にも出て頂きたかった。外観のみでなく、深みのある銀座の街づくりにつながると思うので。

・ 時間がぴったりで良かった。

・ フランス人と日本人の感覚からまちづくりの両方理解でき、とても興味深く素晴らしい会だった。

Q4：将来の銀座のまちづくりを考えるにあたって、これからこのシンポジウムでどんなテーマを取り上げたらよいと思いますか？

■銀座文化の形成

・「銀座」という名は、にぎわいの代名詞とも言えるもの。日本橋という様々な発展の基点になった場所からどう移行してきたのか。その「盛り場」としての銀座の形成をもっと知りたい。

・交差点や通りから銀座はつくられていったそうだが、銀座地区における周辺とのつながりはどうなっているのか。（銀座中央通りと、丸ノ内仲通りとのつながり等々）

- ・路地文化
- ・銀座と建築
- ・銀座の文化と生活
- ・居住と銀座

■銀座のまちづくりに参考となるもの(問題点や要望等)

・銀座にふさわしい建物、ファサード、デザインコードなどについて

・それぞれ文化歴史の違う世界を、どう銀座に取り入れていくか。（ヨーロッパ、アメリカ、アジア等）

・銀座の残すべきところ、変えるべきところはどこか、識者の方のお話を伺いたいです。

・海外ブランドがイベントをすることが銀座のイベントになるのか？街を歩いていてゴミが落ちていけば拾う。困っている人がいれば声をかける。銀座のまちの皆さんは街を愛していると思う。アキュイユ、歩行者天国、台風でも、まちの人は店よりも通りやお客を思って外に出てくる。まちを大切にきれいにしてきたのは、そういうまちの人だったと思う。今、銀座に必要なものは、内部統制な気がする。銀座らしさがなくなるということは、日本の伝統、技術、おもてなしの心がなくなるということ。日本人の精神、商店街の底力、日本の文化を残すためにどうしたらよいかと考えていく機会がほしい。もっと内部（銀座に関わる人が誰でも）参加でき、議論できるような会を開いてほしい。

・銀座にふさわしいイベントの提案の競合プレゼン。代理店なども巻き込んで、公的な競合プレゼンをするとうまいと思う。

・都市のもつカラー(色合い)は何か。(銀座は何色なのか、似合う色は?)今回、この問題にちょっと触れていたのどびっくり。この問題をもっと深く討議してほしい。

・自然・環境という視点から、銀座はどの方向に進めばよいか。

・商店集積について(老舗と新興の店、ブランドショップ等とのバランスをどうやっていくのか。魅力的な商店集積とは?)

・より具体的な行動に移行できるような形へのシンポジウムに昇華させていくべき段階ではないだろうか。銀座のまちとしてあるべき理念を早く鼎立させ、資本・経済合理性との融合調和を、行政も飲み込んで行動すべき。

・老若問わず、銀座にショッピング・イベントにとでかける楽しさを増加させる試案、実現を。

・「憩い」をテーマにされては?(大内氏の発言より)街角の芸術や(パフォーマンスも含む)、駐車場の必要性(銀座ルールもできたが、本当に必要か。配送車・営業車はどうするか)

・銀座には緑が足りない(最近の並木通りは見違えるようによくなった)並木をつくってほしい、日陰がほしい。

・再開発を行ったまちと比較し、いかに銀座がすごいかということを取って

・魅力ある都市とは「整然とカオス」が同居していることだと思う。今の銀座における「カオス」とは何なのか？整然さばかりが目立っている気がします。「銀ブラ」や「モボ・モガ」「高級感」と同時に「エロ・グロ」が同居していた時の銀座が、絶頂期だったのではないか？

・銀座はまちでありながらも、憩いの空間がある。海に近いこと、街路樹、日比谷公園が大きな要素にあると思うが、ショッピングにとどまらない空間、自然との共存のまちであってほしい。個人的には柳よりニセアカシアが好きだったので残念。また、デパートの屋上の空中庭園があったら嬉しい。

・水辺都市であった頃の東京と今、これから。

・より具体的に。形になるように進めてほしいし、協力したい。

・まちづくりとは建物だけでなく、環境問題、安全性等、未だに研究の余地があり、幅広い知識を必要とする。樹木博士、警察等を予備、その辺の勉強もしたい。

・同じようなテーマで人を変えず、毎年やったらどうか。

・銀座はヨーロッパ、アメリカ、ブランドのまちにしないで。日本のアイデンティティの表現的代表者となることを希望する。

・老舗の力。また老舗の店が生き残れる為には？

・最近の銀座はブランド店の展開もあり、見違えるように変わってきたが、突き出し看板の雑然さがまちの雰囲気をおぼろげにしている。

・街全体のデザインをまとめるにはどうすべきか？

・高層ビル計画があると聞いた。超高層ビルはコラスさんのお話しにもあったように、空の広さがなくなるので規制すべきと思う。

・今後の建て替えに関しては、コンセプト等のオープンに出来る情報をタイミングをみてオープンにする必要があるのでは。

・楽しく魅力的で、生き生きとした風格のある日本の顔をつくる

・今回は「世界都市のなかの銀座」というテーマだったが、今度はもっと視野を狭く、細やかな点まで考えてみたらどうか。その意味で「日本の大都市と比較する」というテーマ。

・銀座来街者として2代目だが、過去の記憶、現在の記録、未来の予感を実感できるまちづくりをお願いしたい。

■出演者の希望

・地元の方々の意見はどう反映させるのか

・テーマを問うよりも、コラスさんなどのような新しく銀座に参加した人や、銀座とあまり関わりのなかった人から見た銀座の感想など聞いてみたいと思う。コストの問題もあるが、数人呼んで(ギャラの発生しない一般人など)座談会形式でもよいと思う。

・専門家などよりも一般の識者から多くの意見を集めるべき。また海外で現実的な都市作りを行った関係者を呼んでみては。長期計画で思い切った施策をいかにするか、また50年後先を見て、新しい建物でも不調和なものは壊す法律を策定しては？

・今回のコラスさんの様に、銀座に店やオフィスを構える方々それぞれが、銀座についてどのように考えているのか、知りたいと思う。

・昔から住んでいる人、最近住み始めた人、銀座で働く人、遊びに来る人それぞれの立場から意見を聞ける場。